

過去帳による東北地方の死亡危機

Mortality Crisis in the Tohoku Region, through the Buddhist Temple Death Registers

溝口 常俊 (元 名古屋大学)

Tsunetoshi MIZOGUCHI (Nagoya University)

k46523a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

本研究は寺院の過去帳を主とし、地誌・統計書、日記、絵図などを加えた歴史資料から災害列島日本の履歴を分析し、将来に向けての災害軽減対策の一助となることを目的とする。日本は歴史上、地震、雷、火事、洪水などの自然災害に加えて、飢饉、伝染病などの脅威により多くの犠牲者を出してきた。それぞれの歴史的事実については記録され、報道され、研究もなされてきた。しかし、こうした災害に対して従来十分に活用されてこなかった資料の一つに過去帳がある。この寺院資料は災害記録を目的としたものではないが故に看過されてきたのだが、じっくりと読み込むことにより事実としての被害実態が明らかになってくる。幾多の災害を乗り越えてきた前人の知恵を学び将来に活かすことができる。

歴史人口学分野において、過去帳研究の弱点として、①村別の死亡率が出せない。②寺院の檀家数の推移が正確に把握できない、があげられるが、その一方で、①長期にわたって死者数の推移がわかる。②0歳での死者もわかる場合がある。そして、③複数の寺院記録の比較により、危機年の全国性、局地性がわかる。等々の利点もある。

本発表では、秋田県北部米代川流域の8カ寺と岩手県陸前高田市の1カ寺の過去帳により死者数の推移を最初に示し、全国的な見通しをするため、静岡県浜松市、広島県因島、長崎県樺島の3カ寺についても言及し、歴史上いかなる災害に直面してきたかを比較検討した。

その結果、死因を、全国的、地域的、局地的というスケール別にまとめなおすと以下のようになった。I.全国的に死者数が多かった死因：1)飢饉：①天明，②天保，2)疫病：①文久2年のコレラ・麻疹，②大正7年のスペイン風邪，3)戦争：①第2次世界大戦，II.地域的に死者が多かった死因：1)地震：①安政元年地震，②濃尾地震，③関東大震災，④伊勢湾台風，III.局地的な死因：1)海難事故：①因島，②野母，2)ダム決壊：①鹿角市，3)公害：①浜名湖アサリ水銀，②伊勢の工場排水。

また、過去帳には死因は記されていないことが多いが、死者数の集計単位を、年別だけでなく、月別に検討すると2、3カ月の短期間に多ければ流行病と推定できるし、日別にみて1日で多数出ていれば、原爆、津波、台風、海難事故などであった。年齢別では子供（その多くは3歳以下）の犠牲者が、明治以降衛生上状況が良くなったにもかかわらず、多数の寺院で戦前まで多数記録されていた。

大館市のH寺では文久2年(1862)にコレラ・ハシカが発生し、その犠牲者が子供を中心に、8月、閏8月、9月の3か月に集中していたことを図示するとともに、静岡、広島、長

崎の寺院でも同時期に発生していたことを示した。

また、鹿角市の D 寺では地震、飢饉をしのぐ犠牲者が第 2 次世界大戦時に出ていることを知り、全国各寺院の過去帳でも共通して 20 代 30 代の若者が弔われていた。この事実を身近に感じていただくことを、本発表の結論に加えた。



図1 研究対象寺院

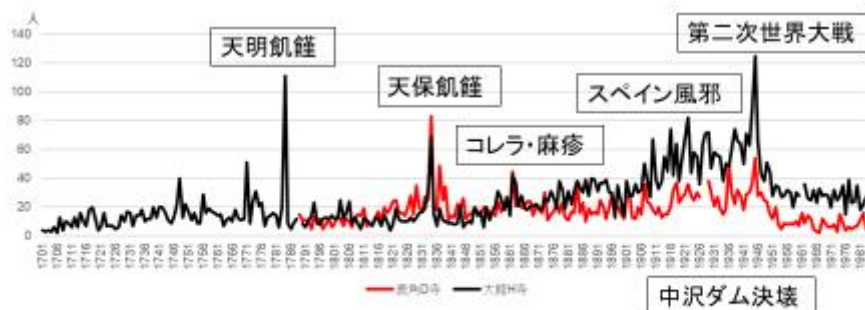


図2 大館市H寺と鹿角市D寺檀家の死者数の推移(1701-1984)

コレラ死者数の時期：疫病(コレラ)犠牲者は2,3か月に集中して現れる。
その例：D寺とH寺、A寺

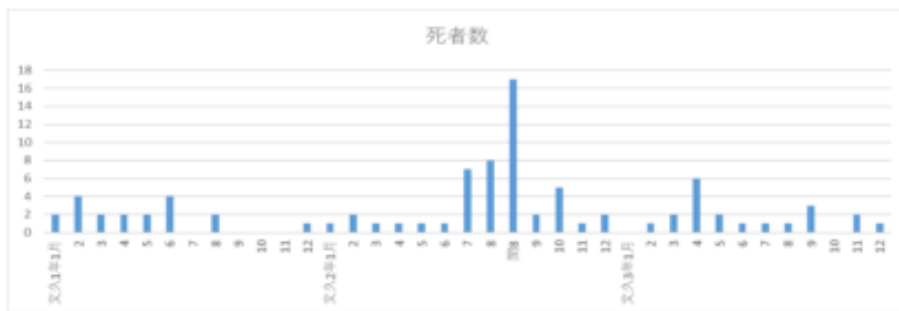


図3 鹿角市D寺の文久2年(1862)とその前後年の月別死者数(平均2.4人/1月)



図4 大館市H寺の文久2年(1862)とその前後年の月別死者数(平均2.6人/1月)